ムンバイ，アールデコ様式の住居建築の発祥・背景と現在への変遷

主査　後藤　克史*1
委員　ヴィシュワ　シュロフ*2

本研究ではボンベイの近代化の基礎となる 19 世紀中頃以降の紡績工業の発展により引き起こされた公衆衛生に関する法整備がやがては住居改善の法律へと発展していく変遷をたどりつつ，特に二つの世界大戦の間，1930 年代を通じて建設されたアールデコ様式のアパートメントを対象にアールデコ様式のアパートメントの平面計画，特にキッチン，トイレと洗浴場と居室との関係性を中心に当時のアパートメント居住に抱かれた「あこがれ」と家庭内での女性地位の向上に至る経緯を明らかにする。

キーワード：１ボンベイ，２）アールデコ様式，３）テネメント，４）アパートメント，５）公衆衛生，
６）Ideal Home Exhibition，７）Bombay City Improvement Trust，８）Housing Reform，９）キッチン，１０）女性地位向上

RELEVANCE OF ART DECO APARTMENT IN DOMESTIC LIFE IN 1930S Bombay

Ch. Katsushi Goto
Mem. Vishwa Shroff

In the course of the research, the author argues that the relevance of art deco style apartment in relation to the process of modernisation of the domestic life in 1930s Bombay. Art deco style is not expression of new city against Victorian Gothic architecture of imperial period, rather it was rooted in the raise of governing public health beginning from the mid-19th century in Bombay as well as change in the role of women in the Indian households at that time.

1.　研究の経緯

1.1　ムンバイ（ボンベイ）とアールデコ様式

ムンバイ（1995 年まではボンベイ）はインド亜大陸西海岸に位置しており，首都デリーに次ぐインド第２の大都市である。現在のムンバイは南北 40 キロほどの半島に広がっており，北にはサンジャイ・ガンディー国立公園があり，南は中心市街地のフォート地区とその東に位置するムンバイ港がある。南は 18 世紀からの英国統治時代のフォート地区から，18 世紀から 19 世紀にかけて発展した高密な土着民の地区であるカルバデビ，マンドビがあり，その北にはバイカラ，パレルといった 19 世紀中頃のムンバイの大発展を支えた繊維工業を始めとする工業地域が半島の東西を横断している。ここまで，おおよそフォート地区から九キロである。さらに北に向かえば，1920 年以降に計画，建設された三層から四層のアパートメント[注 1)]がダダー，マタンガから始まり，さらに東はチェンバー，西はバンドラとさらに北へと住居地域が広がることとなる。

『House But No Garden』[文 1)]の著者 Nihil Rao によると，これらの低層のアパートメントを含む工業地域より北の地域はその形成過程より郊外（Suburban）と定義している。加えて，西洋および北米の郊外の発展と比較して，ムンバイでは意識的にアパートメントを中心とした共用住宅の建設が郊外境遇を特徴づけたとしている。

18 世紀後半，イギリスにはじまった産業化に続く近代化はその後 20 世紀中後期までに全世界に広がることになるが，イギリス統治下のボンベイにおいては第一次大戦以後に顕著に現れる。

本研究ではボンベイの近代化の基礎となる 19 世紀中頃以降の紡績工業の発展により引き起こされた公衆衛生に関する法整備がやがては住居改善の法律へと発展していく変遷をたどりつつ，特に二つの世界大戦の間，1930 年代を通じて建設されたアールデコ様式[注 2)]のアパートメントを対象とする。

1.2　本研究の目的

アールデコ様式のアパートメントは今も南ムンバイの町並みを作っている建築群となっていが，特にインド建築家協会（1929 年にボンベイで発足）が 1937 年に開催した「Ideal Home Exhibition」や当時のセメント会社，タイル製造会社等の建築資材を扱う会社が率先して新しい居住の形を提案していたことが影響していた。

Abigail MacGowan 教授によると建築家協会の展示をは

*1 明治大学研究・知財戦略機構　客員研究員　*2 芸術家

じめ，新聞での宣伝広告（家具，住宅設備が中心）は主婦をターゲットとしたものが多く，近代化に伴い，当時の女性の家庭内での地位が伝統的な男性中心のそれから変化している背景も伴い，住宅建築における女性の参加がはっきりと現れていると指摘している[文2)]。特に住宅建築のインテリアに関する要素である，床タイルからキッチンの仕様，仕上げや家具に至るまで，家庭内の女性がデザインの決定に深く関わることになる（以前は男性のみが決定権を持っていたと言っても過言ではない）。このような女性の家庭内での地位の向上は 19 世紀中ごろから今日に続く，健康な成人男女が「理想的家庭」（家庭像）を作り上げるという概念の基礎となっていることと重なる。しかしながら，今日においては家庭像にも多様性の考え方の広がり子供のいない夫婦，同性婚，高齢者の一人暮らし等，「理想的家庭」像に当てはまらない居住者に焦点を当てれば，必ずしも「理想的家庭」をターゲットとした宣伝広告，住宅設備，間取りが住宅の質の向上に結びついているだろうか。

本研究では 19 世紀中ごろから 20 世紀初頭のボンベイにおける公衆衛生へに関する法整備がやがては住居改善の法律へと発展していく変遷を明らかにしつつ，アールデコ様式のアパートメントの平面計画，特にキッチンと居室との関係性を中心に当時のアパートメント居住に抱かれた「あこがれ」と家庭内での女性地位の向上に至る経緯を明らかにすることを目的とする。

1.3　本研究の意義と既往研究

Abigail 教授の著書『Domestic Modern: Redecorating Homes in Bombay in the 1930s』の冒頭に 1934 年６月のインドタイム誌の広告を引用している。この広告は新聞の紙面の個人欄を模し，ボンベイの婦人に宛てた手紙のような広告であった。アドバイスを婦人に語りかける調子で以下のうように書かれていた。

「今日は主人にあなたが欲しい家具の話をして，ショールームに行きたい話をしてみなさい。そして明日にはあなたの理想とする美しい家を伝えなさい。今が家を新しくする時なのです。そして主人にイエス（YES）と言わせるのです。」

1930 年代当時の下位中産階級では経済的にはもちろん，上位カースト[注3)]の風習のために女性は広告にあるような振る舞いは男性，夫の前ではできなかったであろう。しかし，Abigail 教授は広告のターゲットは上流，上位中産階級であり，女性は教養があり新しい様式，スタイルを家庭内に持ち込むことによりドメスティック空間を近代化させたとしている。

また，Art Deco Mumbai Trust はアパートメントに限らず，ムンバイのアールデコ様式の建築を研究・調査，保存活動をしている。アールデコ様式を当時の社会状況に応じ市民社会の形成と共に発展した様式であるとしている。Sir JJ College Of Architecture で教鞭をとる Mustansir Dalvi 教授もまたその著書『‘This New Architecture’: Contemporary Voice on Bombay’s Architecture Before the Nation State』[文3)]にて植民時代のヴィクトリアン・ゴシック様式の建築とは対照的にアールデコ様式の建築は市民によって建設されたと記述している。

Nikhil Rao による前出の著書ではカースト制度と郊外の開発の関係性を明確にするなど近代化に伴うインド独自の社会構造変化も論じている。

本研究はアールデコ様式のアパートメントを対象とする点では上の４つ既往研究と共通点が多いが，19 世紀中ごろからの英国での公衆衛生法から住宅法への変遷とボンベイでの公衆衛生法の成立から Bombay City Improvement Trust（BCIT）の設立とアールデコ様式のアパートメントの建築計画，家庭内の衛生管理と女性地位向上との関係性を議論の中心にしている点において特異である。また，次の研究の方法にて触れるが，調査においては実際にアパートメントの住戸内を計測・記録を行う点においてもプライベートな空間を包括的に扱うこととなりあまり前例のない調査・研究内容となっている。

1.4　方法と構成

第２章からのボンベイの発展と公衆衛生への関心の高まり，および BCIT の設立と都市計画に関しては既往研究や政府の記録を参照することにより，特に公衆衛生と住宅政策の関係性に重点をおく。

第３章では住居内での衛生管理の変遷を上位カーストの風習に関連づけて，既往研究よりテネメントとアパートメントを対比する形式で明らかにする。

第４章では現存するアールデコ様式のアパートメントの平面計画の調査のため，３D スキャナとフォトスフィアカメラを搭載した機材を利用することで住戸全体をドキュメントすることとした。尚，本研究は COVID-19 のロックダウン中での訪問調査となったため，一人でも扱うことのできる３D スキャンの機材を利用することになった経緯があることを付け加えておく。対象となるアパートメントは南ボンベイの Church gate 周辺の上位中産階級向けのアパートメントと BCIT によって開発された Dadar-Matunga Scheme のアパートメントを調査することとした。

第５章ではアパートメント居住により起きた家庭内での衛生管理の変化，女性地位の変化を積極的なアールデコ様式のアパートメント建設と関連づけて議論する。

2.　コロニアルボンベイ，ペストの流行，都市計画

2.1　19 世紀以前，フォート地区の形成

1498 年，バスコ・ダ・ガマのカリカット（現在のコージコード）への上陸後インド西海外沿いコンカーン地域はポルトガルが領地としていた地域であり，ボンベイは

1533 年にその領地に含まれることとなる。当時のボンベイは七つの独立した島であり（**図 2−1**），イギリスへは 1661 年にポルトガルの王妃がイングランドの王と結婚する際にポルトガルからイギリス東インド会社へ譲渡された。ボンベイ島の東には天然の良港に恵まれているため，1678 年にイギリス東インド会社をスーラトからボンベイへ移すと，1683 年までにはフォート地区に城壁を建設し整備した[文4)]（**図 2−2**）。フォート地区は現在でもムンバイの中心市街地として栄えており，ボンベイ証券取引所はじめ有数の金融センターである。

1850 年代までにボンベイ島と六つの島は土手道を建設し，引き潮を待ってマングローブ林を埋め立てることを繰り返し，陸続きとなる。当時の総督エルフィンストン卿（在任期間 1853−1860）は，ボンベイの商業に従事する階級は大陸側との繋がりも薄く，独自の社会を構築しており，それ故にコスモポリタンな人々だと記した[文5)]。Dalvi 教授はアパートメント居住がムンバイのコスモポリタンとしての都市の側面を築いたと著書で触れているが，一九世紀中頃にはすでに多様な文化を許容する土台ができていたと読み取れる。エルフィンストン卿の在任期間にはフォート地区の城壁を取り除く決定もされ，ボンベイはこの時期を境に大きな発展を遂げることとなる。城壁の取り壊しはエルフィンストン卿の在任期間中には実現されず，総督バートル・フレール（在位期間 1862−1867）の在任中まで持ち越された。

左：図 2-1 ボンベイ島とコラバ（Island of Bombay and Colaba, 1843）出典：British Library, via Wikimedia Commons
右：図 2−2 ボンベイ市街とフォート地区（Town and Fort of Bombay, 1859）出典： A Handbook for India Part ii Bombay フォート地区，高密な土着民の地区であるカルバデビ，その北のバイカラ（Bycullah と記載）が読み取れる

2.2 紡績工場の発展

1854 年，紡績会社「Bombay Spinning & Weaving Company」によってボンベイ島のターデオに初の紡績工場が建設された。これによりボンベイは貿易都市から製造業からなる工業都市へと移行していくことになる。いくつかの要因が重なり，ボンベイの工業化は進むことになる。その一つとして，1838 年にはマヒムとバンドラ間の湿地に建設された土手道が完成し，七つの島からなるボンベイは大陸との行き来が陸を通じて可能になった。また，ボンベイの東側，大陸を治めていたマラーター王国の衰退によりイギリスが大陸への勢力を強め，1863 年にはインド亜大陸の西側のデカン高原の麓，コンカン地域に鉄道が開通した。大陸西側における地域間の相互の行き来が可能になり，ボンベイと外国諸国，イギリス本土との陸を通じての貿易路が誕生した。

1868 年のスエズ運河の開通はボンベイの地理的な要因も重なり，イギリスへの航路が大幅に短縮され貿易と製造業を飛躍的に発展させた。1861 年から 1865 年にかけての南北戦争の影響でアメリカからイギリスへの綿花の供給が困難になり，インド中央，西部で生産された綿花がボンベイ市場を通じて供給されることとなった。

2.3 埋め立てと公共，教育・文化施設，ヴィクトリアン・ゴシック様式

1856 年には 10 の紡績工場で 6500 人以上の労働者が働いており，その後 10 年間で紡績工場は 36 箇所まで増加し，多くの労働者の流入があった。1864 年の初の国勢調査によるとボンベイの人口は 81,6562 人であった[文6)]。この 1860 年代の綿工業のブームは商業発展のみならず，これを契機として総督バートル・フレールの政策により会社株式の取引を助長させ，個人の投資を多く集めることとなり，フォート地区西側の海岸線の埋め立てを可能にした。

図 2-3 ボンベイのエルフィンストン・サークル 1870 年代に撮影されたエルフィンストン・サークルとその先のプロムナードをタウンホールを背にチャーチゲートストリートを東から西に見る。その先はアラビア海である。出典：British Library

1872 年にボンベイ市政（Bombay Municipal Corporation），次の年には港湾局（Bombay Port Trust）が正式に設立されると，フォート地区西側の大規模な埋立事業に伴い公共施設，教育・文化施設が建設された。当時の建設ラッシュにおいては大英帝国の帝国主義を明確に表現するた

め，ボンベイ市の建築家によりヴィクトリアン・ゴシック様式にて建設された。
タウンホール（今日は州立図書館）からエルフィンストン・サークル（現在のホーニマンサークルガーデン），フローラ噴水，オーバルマイダン（広場）を横切り，さらには後に建設されるチャーチゲート駅へと続くチャーチゲートストリートはこの時期に埋め立てられ，フォート地区の城壁の解体後の都市軸をつくりあげた。当時はオーバルマイダンが最西端なっており，アラビア海に面したプロムナードであった（**図 2－3**）。

2.4　公衆衛生への関心の高まり，ハウジング政策

ヴィクトリアン・ゴシック様式の建築群はボンベイの美しさを象徴するようになり，ジョージ・W・クラッターバック牧師の著書『In India （the Land of Famine and of Plague）；or, Bombay the Beautiful; the First City of India』[文7]によれば，総督リチャード・テンプル（総督在任期間 1877-1880）はボンベイを「アジアの王女（the Queen of Asia）」と言い表し，大英帝国第二の都市（ロンドンが第一の都市）と認識されるようになり，一般には「美しきボンベイ（Bombay the Beautiful）」と形容された。しかし，その著書のタイトルにあるように飢餓・衛生問題は紡績工場の発展と，それにともなう労働者の流入のため深刻な状況にあった。

G・オーウェン・W・ダンの論文『The Housing Question in Bombay』[文8]においては「美しきボンベイ」を目にする前に，数キロも先から紡績工場の煙突から上がる黒煙が海上を覆っていたとある。さらにこの論文によると，1865 年にはすでに紡績工場の労働者とその居住区の公衆衛生への関心が高まり，1872 年には法令においてボンベイに保健所を設立に関連する条項が初めて記述され，1888 年に制定された「ボンベイ法第三号 1888 年（Bombay Act No. III of 1888）」にて保健所設置と公衆衛生に関する内容は大幅に改訂され，その実施効果を期待できるようになった。この公衆衛生を改善する流れは総督サンドハースト卿（在位期間 1895-1900 年）が 1895 年に総督に在位した時も継続され，サンドハースト卿が優先して行ったことは労働者居住区を含めた劣悪な環境下におかれた地区を訪問することであった[文9]。その意図は公衆衛生に関する法案を制定することにあり，サンドハースト卿はイングランドの「労働者階級住宅法 1890 年（the English Housing of the Working Class Act 1890）」を基本としてボンベイでの法整備にあたった[文10][注4]。「労働階級住宅法 1895 年」は 1885 年に発令された同法の改正であるが，1885 年の法令は公衆衛生法（Public Health Act）であるのに対して 1890 年の法令は住宅法に関連する法令と認識されている。それは 1890 年の法令では地方議会が土地を買い取りテナメントおよびアパートメントを建設できる権限を明記したことで住宅の建設に実際に関与できることになったためである。このように当時の西洋諸国では工業化に伴い，労働者階級の衛生環境を発端として住宅を整備することで社会的統制を図ることが広く受け入れられていた。

2.5　1896 年の鼠径線ペストエピデミック

ムンバイにおいても公衆衛生の問題への関心の高まりは紡績工場に従事する労働者の住環境の改善が不可欠だという機運が高まり続けていた。一八九八年二月にサンドハースト卿による議案「ボンベイ市改善議案（City of Bombay Improvement Bill）」がボンベイ市立法府に提出された。その中で次のように当時のボンベイの状況を説明している[文11]。

「ボンベイの 30％～40％の人口が島の 3％～4％に居住している。これらの地区はロンドンの最も密集している地区の二倍から三倍の人口密度である。ボンベイ全域の病気や事故を含む普通死亡率が人口千人当たり 40.71 人に対して，これらの地区の普通死亡率は 52.15 人から 68.09 人である[注5]」

この議案はすぐさまに可決され，「ボンベイ法第四号 1898 年（Bombay Act No.IV of 1898）」に法令として発令される。この法令の下，次項で触れる Bombay City Improvement Trust（以降 BCIT）が同年に設置されることになる。
サンドハースト卿の議案の可決の２年前，1896 年に鼠径腺ペストが流行することになる。鼠径腺ペストが BCIT の設立の直接の原因として記述も多くあるなか，本研究では四半世紀ほどかけて公衆衛生（Public Health）の問題が疫学，医療制度等で解決する問題だけでなく，西洋諸国の住居改善（Housing Reform）の動きとの連動の中でやがては今日の一世帯一戸というハウジングの形態が理想となりやがては標準となる変遷を重要視する。しかし，鼠径腺ペストが法案の可決を早める原因となったことは間違いないと考える。

2.6　チャウル（Chawl），労働者居住区

鼠径腺ペストにより，およそ 50 万人の人口がボンベイを離れることになる。その内の約 30％は紡績工場に従事する労働者とされる。死者は 1897 年から 1899 年の間で 44,984 人であった。1901 年の国勢調査によると，これはボンベイ全体の人口の 5.8％にあたる。一方，労働者の居住地区における死者数の割合は 12.5％であった[文12]。

『The Housing Question in Bombay』の著者 G・オーウェンによると，紡績工場に従事する労働者に限らず，ボンベイの人口 78 万人あまりは 158,199 戸のテネメント（Tenement）に住んでおり，そのうち 138,031 戸は一部屋からなるテネメントであり，その総居住者数は 581,070 人であった。これは一部屋に平均で 4.2 人住んでいることになり，人口全体の 80.86％は一部屋のテネメントに住んでいることとなる。特にこのような一部屋

からなるテネメントはボンベイ土着の言葉でチャウル（Chawl）と呼ばれている。BCIT の設立以後も大幅に住環境が改善されたチャウルが建設されており，今日でもムンバイ市内で見られる。しかし，BCIT は，1860 年から 1890 年にかけて建設されたチャウルを解体の対象としており，大変劣悪な状況であった。（**図 2－4**）は典型的なチャウルであり，8 フィート（約二 2.4 メートル）四方ほどの部屋が背中合わせで並び，且つ動線としての廊下も隣の建物の壁で閉ざされており，光や風が入る余地がない。このようなチャウルは BCIT によって解体されることとなった。以後もチャウル，一部屋もしくは二部屋からなるテネメントの共用住宅は BCIT や，特に 1919 年に設立されたボンベイ開発局（Bombay Development Directorate）が中心となって建設を進めた。

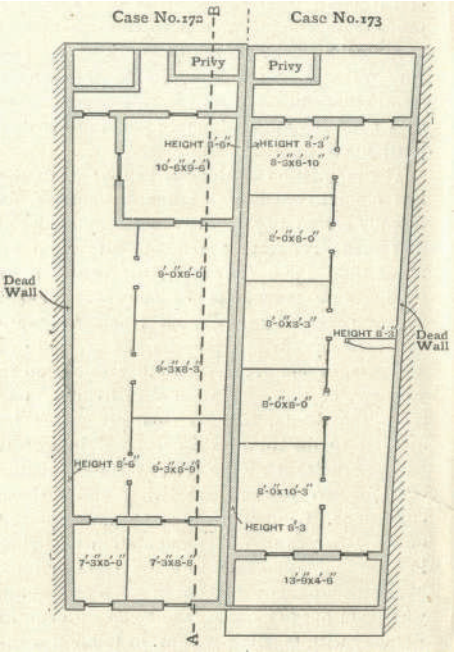

図 2-4 バンダリ・ストリート，クンバルワダ地区のチャウルの平面図。出典:G. Owen W. Dunn の The HousingQuestion in Bombay

2.7　ボンベイ市改善局（Bombay City Improvement Trust, BCIT）の設立

BCIT は前項でも触れたように，居住区の解体も可能な権限が与えられていた。権限は六つの計画（Scheme）から構成されていた。改善計画（Improvement Scheme），道路拡張計画（Street Scheme），埋立計画（Reclamation Scheme），警察官舎（Police Accomodation Scheme），その他の計画（General Scheme），土地取得（Acquisition of Land Scheme）である。改善計画の中で居住区の解体と建設が同時に可能であった。キャロライン・E・アーノルドによれば，居住区の建設よりは解体が優先して行われ，実際に 1920 年までに 24,428 戸のテネメントが解体され，新しいテネメントの建設は 21,387 戸に留まった[文13)]。この BCIT に与えられた権限，特に労働者階級の居住区の解体，建設に関する権限は，他の大英帝国の自治領（Dominion）を除き他の領地ではなかったことであり，ボンベイにおいて明確な政治的な議論を生じさせた[注6)]。

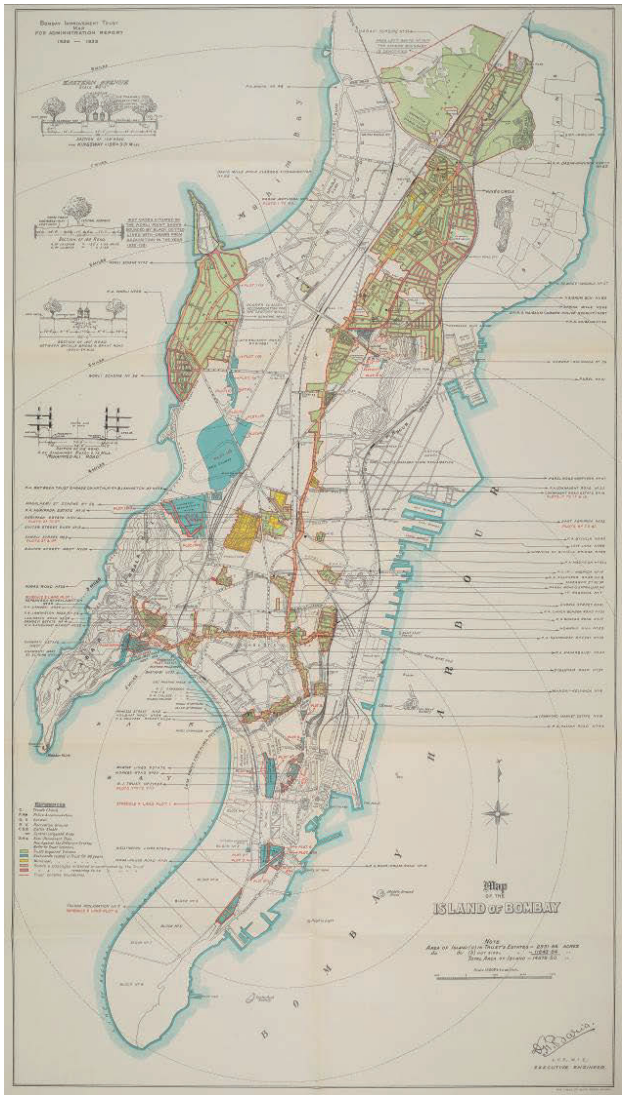

図 2-5 ボンベイ市改善局（BCIT）の計画図 Map of the Island of Bombay, The Times of India Press, Bombay, 1933

出典：British Library ／ユニフォトプレス

こと，居住区の解体と建設に関しては BCIT の実績には疑問が残るが，六つの計画の内，特に道路拡張計画，埋立計画と土地取得とそれにともなう郊外の開発は今日のムンバイの都市構造の基礎となっており，特筆すべきものである。道路拡張計画においてはプリンセス・ストリートに代表される東西の道路の拡張が行われ，ボンベイの南北に長い半島を横切るようにアラビア海からの南西の風を北東に向けて通すことを目的とした。埋立計画では BCIT に加えてボンベイ開発局，港湾局がバック湾を含む南部のコラバ地区，マリンライン地区を埋め立てることになり，今日のバック湾に面したプロムナードはマリンドライブと六層程度の中層のアールデコ建築が並ぶこととなる。（**図 2－5**）

2.8　郊外の開発

BCIT はイングランド，スコットランドにおける田園都

市（Garden City）をモデルとした郊外の開発に多額の資本を投じて，土地を取得し，区画整理をすることにより実現させた。Dadar-Matunga Scheme に代表される低層低密度の開発がなされ，全体の四分の一は道路を含む都市公園とし，建ぺい率は 33%を上限とした[文15)]。（**図 2－5**）の半島の中心を北東に向かって伸びる計画。高密化しているフォート地区周辺の中心市街地のさらに高密度化を懸念して，BCIT は Dadar Matunga Scheme においてテネメントの建設でなく，中心市街地から下位中産階級（Lower Middle Class）が住み移ることのできるビラ（Villa）やバンガロー（Bungalow）と呼ばれる戸建住宅の開発を計画していたことが知られている[文16)]。しかしながら，中心市街地の下位中産階級は結果的に中心市街地に残りテネメントに住み続け，郊外は 1920 年頃からの新しい下位中産階級の住民たちによりアパートメント居住へと移り変わっていく。次項からは郊外での下位中産階級のアパートメント居住への移り変わり，また，中心市街地での新たな埋立地区に建設されることとなる上位中流階級，上流階級が居住するアパートメント居住様式とそれが「あこがれ」の対象として意図的に発展したことを論ずる。

3.　テネメント，アパートメント居住，衛生管理

3.1　上位カーストとテネメント

ニキル・ラオによると中心市街地に隣接する地区に住む下位中産階級はテネメントに住むことを好んだわけだが，その背景にはインドのカースト制度による上位カーストの習慣，信仰が深く関係している[文17)]。一般的に知られている制度としては身分制度で社会的，政治的な制度である。元来，清浄（Purity）と汚染（Pollution）をコンセプトに身分を分け，区別する仕組みである。清浄と汚染の区別は上位カーストなればなるほど，厳格に守られている。また，中位カーストや他の宗教であっても，厳格な清浄と汚染を区別するしきたりが上位カーストが振舞いと認識され，習慣として根付いている。

上位カーストの厳格な清浄への信仰は家庭内でも日常的な習慣となっている。特に人の身体に関わる排泄，食事，洗浴に顕著にあらわれる。近代的な衛生設備器具の無い時代に発達した制度であることと捉えると理解しやすい。排泄物，食材や洗浴に使用した雑排水は不浄であり，住居内に持ち込むことは禁じられていた。排泄物，雑排水は直感的にも理解しやすい。食材，食事に関しては人は不浄であるという考えから，一端人の手に触れた食材，食事はすぐに住居外へ持ち出すことで清浄を保つことが基本となる。

3.2　上位カーストとテネメント

近代的な衛生の考え方をもとに発達した衛生設備を室内もしくは隣接する形式のアパートメントでの居住と比べた時，共同のトイレや洗い場をもつテネメントが上位カースト・下位中産階級とっては清浄と不浄を明確に分けるという習慣を保つ観点から好まれた。BCIT，ボンベイ開発局が新たに建設したテネメントの平面図（**図 3－1**）から読み取れる。

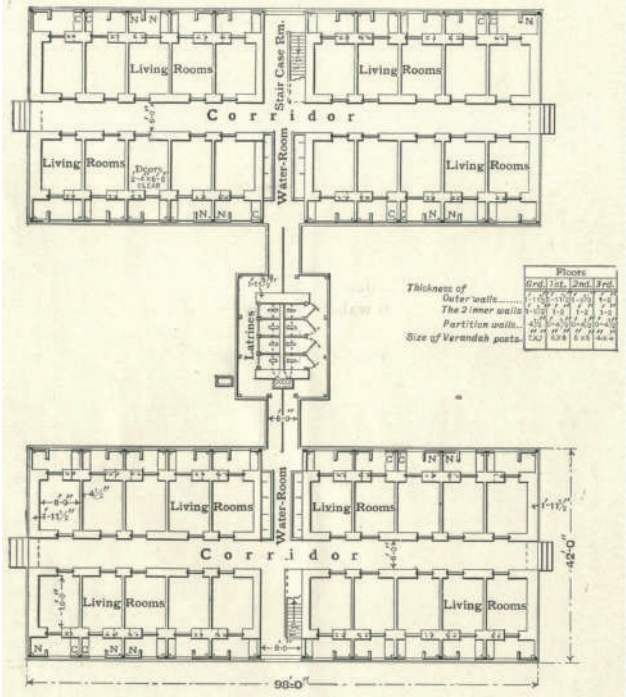

図 3-1 BCIT によって建設されたテネメントの平面図

出典：The Housing Question in Bombay[文18)]

中廊下をはさんで Living Room と記された一部屋の居住空間がならび，ベランダの半屋外にキッチンと洗浴場がある。建物中央には階段室，Water-Room と記された洗い場があり，渡り廊下でつながっている別棟に共同トイレ（Latrines）が各階にある。排泄物は各戸内に入ってこないことはもちろん，キッチンや洗浴場もベランダに配置されることで不浄なものを屋内に入れないという習慣が守られる。

3.3　アパートメント居住とトイレ，キッチン

1920 年代の後半には，Dadar Matunga Scheme に代表される郊外の開発では土地の価格の上昇によりヴィラやバンガローといった戸建住宅の低密度の開発ではなく，中層の共用住宅が求められるようになった[文19)]。加えて，セメントが比較的安価で手に入ることができた理由で中層のアパートが可能になったことも後押しをした。後に触れるが，ボンベイのコンクリート協会（The Concrete Association of India）も鉄筋コンクリート造であるアールデコ様式の建築の普及に大きな貢献をしている。感染症の蔓延を予防する観点からはテネメントにみられる共用トイレ，洗い場は最適解ではなくなり，水洗式の衛生設備の発展からトイレ，洗い場を各住戸に含んだアパートメントの建設がされることとなった。

R・S・デシュパンデは 1930 年代から『Residential Building Suited to India』，複数の『Modern Ideal Homes

for India』と題した，技術書ともとれる書籍を出版した。後者の『Modern Ideal Homes for India』ではデシュパンデ自身が 1936 年から 1937 年までに西洋諸国を周遊してきた中で近代的な完備住戸（Self-contained Dwelling）としてのアパートメントの平面計画，施工とが記載されている。上位カースト・下位中産階級がテネメントを好み，清浄と不浄の扱いの習慣をアパートメント居住でも可能な平面図が初期の書籍に見られる。

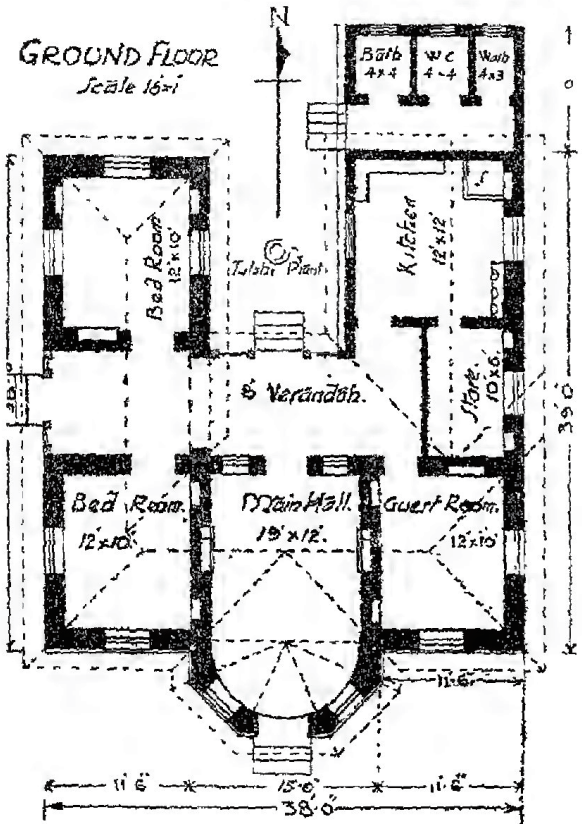

図 3-2 サラスワットブラフミン（バラモン）戸建住宅平面図

出典：Residential Building Suited to India 文20)

（図 3－2）はプネの上位カーストであるサラスワット（Saraswat）ブラフミン（バラモン）の戸建住宅の平面図である。玄関は南向きのポーチの先端にあり中央の外部に面したベランダを経て，二つの寝室，客間へと通じている。住まい手は上位カーストであるバラモンなので清浄と不浄の習慣は厳しく，それが平面図に反映されている。トイレは居住部分から極力離れており，ベランダおよび外部を経た北東の角に配置されている。キッチンも外部に面したベランダを通じた動線に直接面している。これにより，清掃人が各居室に立ち入ることなく，直接にキッチン，トイレに行くことが可能である。

デシュパンデは初期の書籍では戸建住宅を中心に扱っていたが，1939 年の『Modern Ideal Homes for India』では鉄筋コンクリート造のアパートメントが中心に扱われている。

（図 3－3）では３層の階段室が２つあり，各階に４戸の

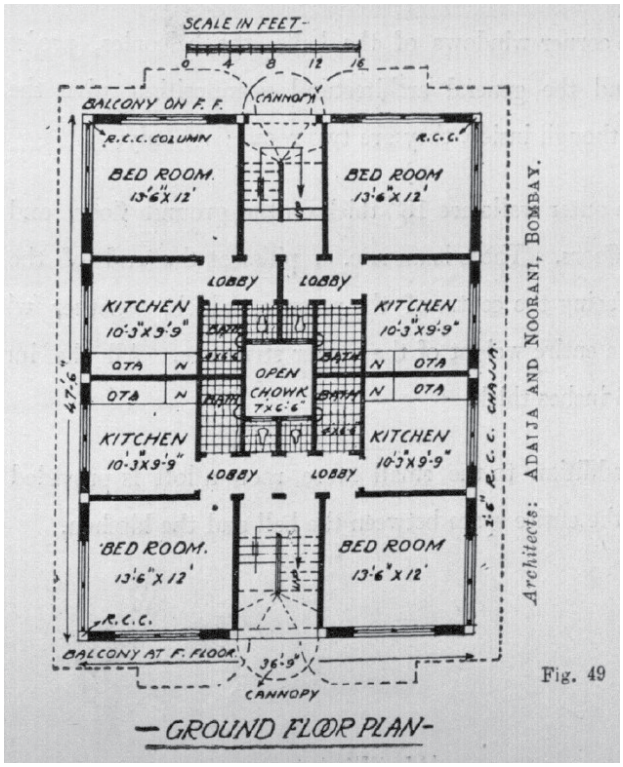

図 3-3 ３層からなるアパートメントの平面図

出典：Residential Building Suited to India

住戸が配置されている。キッチンを除けば，ほぼワンルームと言えてしまう住戸である。ここでも，動線によって明確に居室部分とトイレ，キッチン，洗浴場が分かれている。階段室からロビーを経てキッチン，トイレ，洗浴場に入る動線を取ることで清掃人は居室（Bed Room と平面図に記載）に入ることなく掃除を行い退室することが可能となっている。平面図の真ん中に換気のための中庭（Open Chowk）がある。外部に面するベランダを持たないため，トイレ，キッチン，洗浴場が完全に建物内に取り込まれた平面計画である。

テネメントではすべてを完備した住戸ではない代わりに，清浄と不浄の境界が明確であった。デシュパンデは見事に平面計画を段階をへて，清浄と不浄の境界をアパートメント居住に対応させたと言える。Dadar Matunga Scheme では特に南インドからの上位カースト・下位中産階級の人口流入があり注7)，これにより新しい上位カースト・下位中産階級が現れ始めたこととなる。

4.4 Church gate 周辺の上位中産階級向けのアパートメントと Dadar-Matunga Scheme のアパートメント比較調査

ここまで公衆衛生の観点から都市計画，アパートメント居住への変遷をたどってきた。さらに本研究では実際のアールデコ様式のアパートメントの住戸を訪問調査しその考察を行った。（図 4－1）では訪問調査した地区をしめす。

（図 4－2）は Church Gate 周辺の Figure Ground 図であり，東側に Fort 地区，そしてヴィクトリアン・ゴシック様式の公共，教育・文化施設が読み取れる。さらに，南

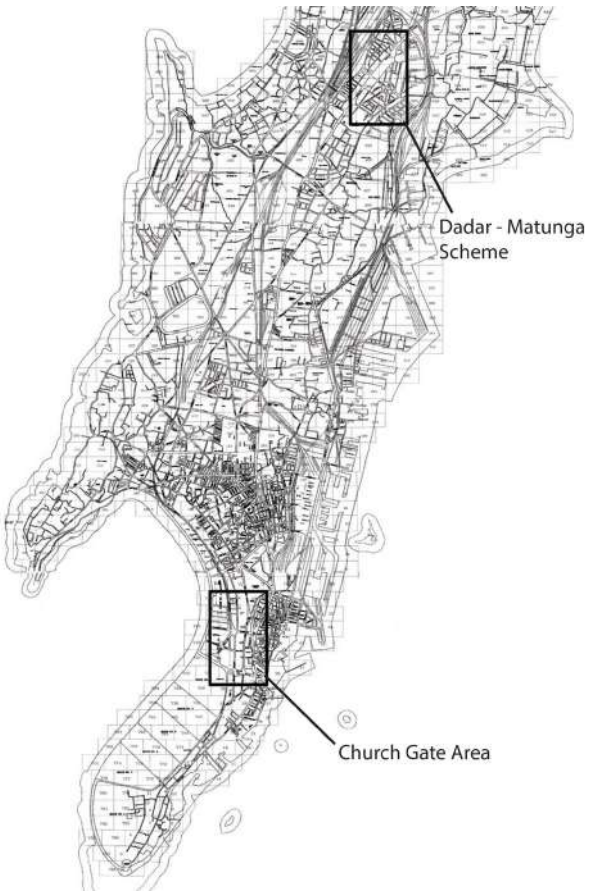

図 4-1 Church Gate Area と Dadar Matunga Scheme。
出典：Municipal Corporation of Greater Mumbai

北に広がるオーバルマイダンを隔ててアールデコ様式のアパートメント建築が広がる。一方，（**図 4－3**）は Dadar Matunga Scheme の Figure Ground 図である。南性から北東に伸びる幹線道路およびオープンスペースを中心に放射状に道路が整備され，低層低密度の開発がされたことが読み取れる。

調査は Church Gate 周辺，および Colaba，Worli で 8 戸，その内４戸はオーバルマイダンに面するアパートメントの住戸で行った。Dadar Matunga Scheme では４戸のアールデコ様式のアパートメント住戸とテネメントを調査した。比較のために 1930 年代以前の住戸も調査を行い，明らかな平面計画の違いが動線，特に廊下の存在から見ることができる。ここでは４戸のオーバルマイダンの住戸，Dadar Matunga Scheme から３戸の住戸とテネメントを比較する。

（**図 4－4**）は同縮尺で 10 の平面図を方角を同じにして比較した図である。A から D はいずれもオーバルマイダンを東に見る平面計画となっている。A から D は共通してエントランスが２つ正面にあり（中黒矢印），フォーマル利用とインフォーマル利用と分けて利用されていたことが読み取れる。また，キッチンと給仕人のエントランス（白抜矢印）は隣接しており，そのほかの住戸の居室とは分離が図られている。キッチンとそのほかの居室は

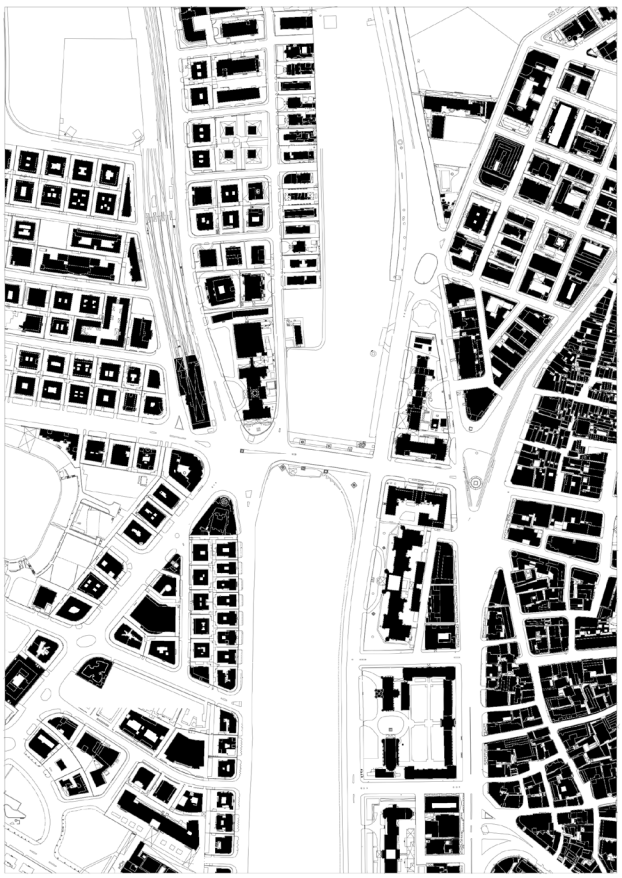

図 4-2　Church Gate 周辺の Figure Ground 図
縮尺 1:10,000

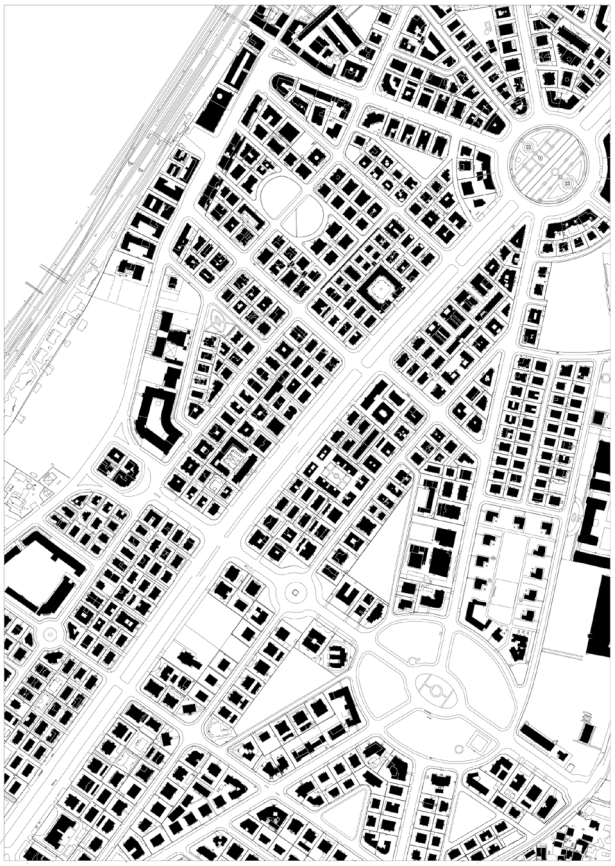

図 4-3　Dadar Matunga Scheme の Figure Ground 図
縮尺 1:10,000

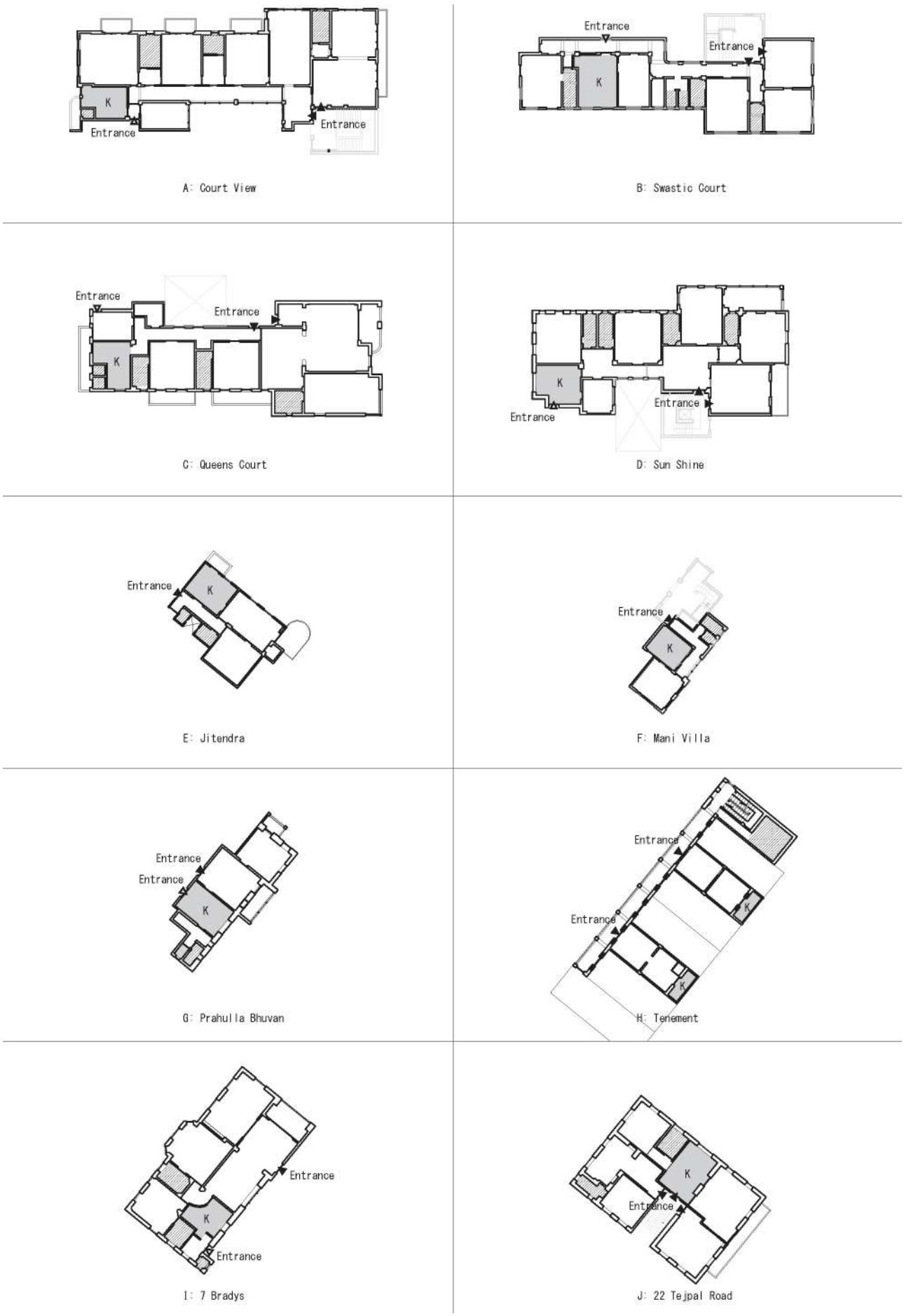

図 4-4　オーバルマイダン，Dadar Matunga Scheme および 1930 年代以前の居住形式毎の平面計画分析　縮尺 1:500　上の図が北

廊下で繋がれている。加えて，斜線でしめしたトイレ兼洗浴場は各寝室に付随するが，廊下からも直接アクセスが可能（例外はあるが）であり，ここでも給仕人と住人との動線の分離が明確である。

一方，オーバルマイダンの住戸は上位中産階級のアパートメントであることに対し，Dadar Matunga Scheme の３つの住戸（E,F,G）は下位中産階級の住人であったためにその規模も小さいものとなっている。また，デシュパンデの『Modern Ideal Homes for India』にあるように，エントランスはロビーにつながり，キッチンとトイレ，洗浴場を経て居室へと繋がる動線である。G では共用部より直接キッチンへ入ることができるようになっているため，ロビーが省かれている。また，F では南東側の L 字型のロビーはバルコニーのように開放的であり，外部を挿入することでキッチン，トイレ等の不浄とされるものと居室とを分離していることが明らかである。

I と J は共にアールデコ様式の建築が始まる以前の共用住居であるが，アールデコ様式のアパートメントに見られる廊下やロビーは存在せず，平面計画の違いが顕著に表れている。

図 4-5　Swastic Court のキッチン。簡易的な両側のカウンター。奥の一段上がったところが調理をする場所であり，当初はシンクがある場所に木の調理ストーブがあった。筆者撮影。

訪問調査をした住居はオーバルマイダン，Church Gate 周辺，Dadar Matunga Scheme においても改装が数回にわたってなされており，特にキッチン，トイレと洗浴場は数回にわたって改装されていることが確認できている。B の住戸はほぼ当時のままのキッチン，トイレと洗浴場が残っており，キッチンは床座であることが確認できたうえに，洗浴場には洋式トイレがあるものの，後で加えたことが配管から明らかであった。上位中産階級であっても建設時には当時の風習，習慣をそのままアパートメントに持ち込んだことが明確になった。（**図 4−5**）

4.4　キッチン内の清浄と不浄

マリンドライブ沿いのアールデコ様式のアパートメントのキッチンにも建設当時のキッチンが今日でも利用されている様子が見られる。（**図 4−6**）。

図 4-6　マリンドライブ沿いのアールデコ様式のアパートメントのキッチン。筆者撮影

このキッチンには清浄を保つための習慣と空間構成が明確にあらわれている。部屋の窓際の中央には調理人のみが入ることができる調理場がある。それを囲むようにし五つの床座の食事の空間が他の床面よりは少し上がったところにある。すべての調理は中央の調理の場所で行われ，調理人は体を清めそして調理場に入る。一度調理場に入ったら，家族の食事が終わるまで外に出てはいけない。これはいったん外に出ると不浄とされるからである。家族へは直接調理人から食事が渡され，給仕人を介すことはない。これも不浄を避けるためである。家族を含め，人の手に触れた食事は不浄とされるため，食器類は腰壁で隔てられた左上の端，右端にある洗い場で洗われ，他の居住空間に持っていかれることはない。この家の場合はキッチン内に洗い場があるが，中産階級ではキッチンに広さもないため，キッチン脇の屋外にあることが多い。これはすぐさまに不浄のもの，残飯を家の中から出すという習慣からである。左右のカウンターは後から付け加えられたものである。

5.　考察

5.1　衛生管理のプライベート化

ロビン・エヴァンスは 19 世紀中ごろの English Housing Reform に関して記述した論文，『Rookeries and Model Dwellings – English Housing Reform and Moralities of Private Space』[文 21)] の中で，次のように記している。「住宅改革を先導した彼らは社会を公共の場所から私的な場所（Henry Roberts の Model House をさす）に吸収させることであった。」これは 1851 年にヘンリー・ロバーツが発表した「Model House for Four Families」とそれにともなう Housing reform がもたらした社会的変化を示し

たものである。清浄，不浄といった衛生管理がエヴァンスの言う社会に含まれるとすると，カースト制度では公の場所で管理していた衛生問題が，近代化による衛生設備の発展，アパートメント居住により住戸内に移動したと言える。初期のボンベイでのアパートメントの住戸の平面計画は衛生設備とその諸室が動線で他の居室と隔てられているが,エヴァンスの論文においてもModel Houseとロッヂ（Lodge: 複数世帯の住む一室からなる住戸）を比較していることから，テネメントからアパートメントへの変遷は衛生管理を含む社会が私的なアパートメントの住戸へ移ったと言える。

5.2　衛生，健康の管理

西洋の男性家長とする制度と同じくインドのヒンドゥー教や，ほかの宗教でも同様の家の女性が家族の衛生，健康，子供教育，家族の性の管理を担っていた。アパートメント居住以前は共同で管理していた（管理というよりは，住戸外に置くことで下位カーストに清掃等を委ねていた）トイレ，洗浴場（衛生）とキッチン（健康）が住戸内に含まれることで，家族の衛生と健康を女性が管理すべきこととなる。言い換えれば，上位カーストの習慣による衛生管理に対して近代化にともなう衛生設備と女性という衛生管理の担い手でもって，公衆衛生の問題を私的化したといえる。特に上位カースト・下位中産階級のキッチンでは，給仕人の出入りはあるが，家族の健康を管理し，実際に調理する場所であり，女性の場所となった。結果的には共同のキッチンでなく自身のキッチンを持つことは，女性ための場所を持つことであり[注8)]，これはアパートメント居住でこそ実現したのであった。

また，上流階級，上位中産階級では英国人の影響で19世紀の終わりからハウスキーピングマニュアルやレシピ本が広まり,下位中産階級には1910年には初めて土着の言語で土着の料理を載せたレシピ本が広まる。この土着の料理を載せたレシピ本はその後も広まりSarawat Womens Associationにより1940年代に発行された『Rasa Chandrika』は現在も改正して印刷されている。家族の健康を担うと共にレシピ本という形で知識として実体化されることにより，女性の社会的地位と家族の健康管理という制度が顕在化されたと捉えられる。

5.3　鉄筋コンクリート造とアールデコ様式

インドコンクリート協会（The Concrete Association of India)やインドセメント市場会社(The Cement Marketing Company of India, Ltd）の積極的な鉄筋コンクリート造の普及活動はアパートメン居住の発展に重要な役割を果たした。鉄筋コンクリート造で建設された建物のカタログ，平面図と建物のパースを載せたカタログ兼資料集を出版することで当時の最新のデザインであるアールデコ様式を取り入れた鉄筋コンクリート造の認知とマーケティングを行った。上流階級が住まうマラバー・ヒルの規模の大きな邸宅,マリンドライブ沿いのアパートメント，郊外のバンドラの戸建住宅から地方都市の住宅建築が載せられている。そのどれもがアールデコ様式で建てられた。特筆すべきはアールデコ様式が一部の上流階級だけの様式ではなく，中産階級の戸建住宅やDadar Matunga Schemeでの下位中産階級のアパートメントへも取り入れられていたことである。Dalvi教授は論文『This New Architecture,: Contemporary Voice on Bombay’s Architecture Before the Nation State』中でパル・Pの著書『Bombay to Mumbai: Changing Perspectives』を引用して以下のように記した。「フォート地区の城壁解体後，大英帝国の帝国主義を表すために建てられたネオゴシック様式の建築群と比較して，1930年代，40年代に建てられたアールデコ様式の建築群は市民により様式が採用され建設された。さらに，英国ではなくボンベイで建築を学んだ建築家の手でデザインされ同時代のボンベイ住民の要望に応えた」と続けている。

5.4　あこがれの構築「The Ideal Home Exhibition」

ボンベイ建築家の活躍は1937年11月３日から15日にインド建築家協会（Indian Institute of Architects）によって開催された「The Ideal Home Exhibition」という形で記憶されることになる。とくに若い建築家が実行委員会を構成し成功させた。２週間余りの会期中には10万人の来場者があった。当時のボンベイ州の知事（Premier）B・G・ケールのオープニングスピーチでは当時のボンベイにおいて一部屋からなるテネメントに住む人口は全体の約70%に上ることを指摘され，低所得者層の居住環境の改善には政府と市，そして雇用者が協同することに触れた。インドタイムズ紙によれば[文22)]，知事の意図は批判ではなく，ボンベイの上流，上位中産階級が集まる機会に現状を伝えることであり，いずれ低所得者層，特にスラムに住む住民にも理想の家（Ideal Home）が手に入ることを願うと話した。

当時のボンベイには常設の展示販売をするショールームは少なく，当時のムンバイの建築家はそのような常設のショールームがいずれできることになるだろうが，その先駆けとしてこの展示会を位置づけ，教育的で未来を連想させるために開催したとしている[文23)]。

6.結論と今後の展開

第１章でAbigail教授の論文を引用してアールデコ様式が上位中産階級の女性により新しい様式として家庭内に持ち込まれ，ドメスティック空間を近代化させたとした。ドメスティック空間はプライベート化され外界と途切れた関係だが，1930年代当時のインテリアのスタイルが公にされ，建築家やインテリアデザイナーによるデザインの対象となりえたことはドメスティック空間が一旦は外部からの目にさらされたことである。あこがれの対象としてのインテリアがドメスティック空間の外にあり，

女性の目でそれらをプライベートな空間に新しいスタイルとして取り入れた事実は女性の社会的地位の向上との相乗効果の結果である。

本研究ではテネメントからアパートメントでの居住への移り変わりにおいて衛生管理と健康の担い手として女性が空間を獲得してその地位に向上が見られたと論じた。しかし，現在に目を向ければ，女性が空間を獲得したことでよりプライベート化された役割が明確になる。現在進行形でドメスティック空間における女性のエンパワーメントに関する問題はセクシュアリティの問題だけでなく，エヴァンズが指摘するようにパブリックがプライベートに吸収されたのだとしたら，過去の近代化の過程においてテネメントからアパートメントへの移行が明確であるように,「あこがれ」の対象としての居住空間を絶えず模索することで根本的な変化となりえる。

本研究をさらに展開するならば，80 年以上が経過した現在においてのアールデコ様式のアパートメントの妥当性を改装やリノベーションから調査することができる。さらに，Dadar Matunga Scheme においてはジェントリフィケーションの問題とアールデコ様式のアパートメントがなしえた様式との関係性も議論すべき点となる。

＜注＞

1)後出するテネメントに対してアパートメントを中産階級の一世帯一戸の住戸として用いる。古い用法として英語圏ではスコットランドをはじめこの定義が用いられる。

2)アールデコ様式はパリ万国装飾美術博覧会（Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels modernes）にちなんで名付けられ，20 世紀初頭から 1930 年代にかけて世界的に流行した。

3)ヒンドゥー教における身分制度である。インドではヒンドゥー教以外でもカーストの概念があり，民族や家制度とも結びつき人々を区別する制度として根付いている。一般的に宗教に携わるバラモン（ブラフミン，Brahmin）が上位カーストである。

4)法令は四つの項目でなっており，ボンベイでの法令の制定に際しては第一項と第三項が参照された

5)議事録では死亡率の算出方法については触れられていないが，すべての要因による死亡率と記述があるので，普通死亡率と推察する。ちなみに同時期の日本の普通死亡率は 20 を超える程度であった。

6)ヴァネッサ・カルの論文[文14)]によると，ボンベイ市改善局（Bombay City Improvement Trust＝BCIT）に対するインド人議員の反発が強くなり，結果 BCIT を受け継ぐかたちでボンベイ開発局（Bombay Development Directorate）が 1919 年に設立された。BCIT は実質 1925 年には機能しなくなっており,1933 年にボンベイ市営法人(Bombay Municipal Corporation）に吸収された

7)Nikhil Rao の著書『House but No Garden』ではさらに詳しく，南インドからの移民によって今日の Matunga 地区の近隣が特徴づけられたことが記載されている。

8)1920 年代に誕生したフランクフルトキッチンなどは家庭内の女性が自身の場所を得たからこそ実現し，効率や負担軽減と女性地位の向上に貢献した。

＜参考文献＞

1)Nikhil Rao : House But NO Garden, University of Minnesota Press, 2007, p.4

2)Abigail McGowan : Domestic Modern: Redecorating Homes in Bombay in the 1930’s, Journal of the Society of Architectural Historian 75, No. 4, December 2016

3)Mustansir Dalvi : ‘ This New Architecture’: Contemporary Voice on Bombay’s Architecture Before the Nation State, Tekton, Volume 5, Issue1, March 2018

4)Anonymous : A Handbook for India Part ii Bombay, John Murray,1859, p.274

5)Sharada Dwivedi, Rahul Mehrotra : Bombay The City Within, Eminence Design Pvt Ltd, 1995, P63

6)同上

7)Rev. George W. Clutterbuck : In India (the Land of Famine and of Plague); or, Bombay the Beautiful; the First City of India, The Ideal Publishing Union Limited, 1897

8)G. Owen W. Dunn : The Housing Question in Bombay, Journal of the Royal Society of Arts, March 4, 1910, Vol. 58, No. 2989. pp. 393-413, p.394

9)同上

10)同上

11)Hansard 25th February 1898（英国国会議事録 1897 年 2 月 25 日), The Plague in Bombay, Vol 54 cc6-13

12)Croline E. Arnold : The Bombay Improvement Trust, Bombay Millowners and the debate over housing Bombay’s Millworkers, Essay in Economic & Business History Vol.XXX 2012, pp.105-123, p.105

13)同上

14)Vanessa Caru : ‘A Powerful weapon for the employers?’ workers’ housing and social control in interwar Bombay, Bombay before Mumbai, Penguin Random House India, 2019, pp.213-235, p.214

15)Mustansir Dalvi : ‘This New Architecture’: Contemporary Voice on Bombay’s Architecture Before the Nation State”, Tekton, Volume 5, Issue1, March 2018 pp56-73, p.61

16)Nikhil Rao : House But No Garden, University of Minnesota Press, 2007, p.70

17)同上

18)G. Owen W. Dunn : The Housing Question in Bombay, Journal of the Royal Society of Arts, March 4, 1910, Vol. 58, No. 2989. pp. 393-413, p.400

19)Nikhil Rao : House But No Garden, University of Minnesota Press, 2007, p.103

20)R. S. Deshpande : Residential Building Suited to India, R. S. Deshpande,1931, p.131

21)Robin Evans : Rookeries and Model Dwellings - English Housing Reform and Moralities of Private Space, Translation from Drawing to Building and Other Essays, the MIT press, 1997, pp.92-117. The essay first published in 1978, p.114

22)The Times of India : Better House for the Poor of Bombay Premier’s Plea at Ideal Home Exhibition, The Times of India on 4th Nov. 1937

23)The Ideal Home Exhibition, Journal of the Indian Institute of Architects, January 1938, pp319-327, p.320